

源氏烏帽子折

厚堯風のるく吹いて東日おごそかに輝き。舜雨斜に注いで西園花を粧ひす。今此の時かや四つの夷八つの蠻春も長閑に立浪の。後白河の法皇こそオロシへ別きて目出度き。賢王なれ。地天つ御國を二條の院に譲りあたへおはしまし。玉體安く仙洞に遁れおろさせ給ひながら。萬機を後見まつりごち聞えさせ給へば。道ある御代と百敷や。袂豊に初儀式。フシ治まる。國の兆なる。地既に平繪二年正月七日。武臣安藝守平の清盛院参し。先づ新春の御慶を奏し。別して當年は目出度き事のみ候べき。御悦の表示御座候其の故は。源氏の大将左馬頭義朝藤原の信頼に與し。天下を傾けんとせし所に。蕭冬清盛待賢門の戦に打勝ち。義朝は野間の内海長田を頼み罷下り候所に。長田譜代

の下人なれども勅命を重んじ。當月三日遂に義朝並に婿の鎌田を討取り候段。地神妙に存じ長田の庄司忠致。同じく太郎忠澄召連れ参上仕る。義朝が首は穢を憚り。源氏重代の太刀物具白旗を切取つて。これ清盛が御年玉國安全に治まるも。ウタヒ一張の弓のいきほひたり。東南西北の敵を易く平けん。地法皇大きに御感あり。清盛を中納言長田は六位の従上に補せられ。重ねての院宣には。義朝が事は先祖滿仲より累代忠勤の功厚しと雖も。此の度思はずも朝敵信頼に與し。不覺の最期不便なり。内大臣の正二位を贈官し。朱雀の寺に標を建て。追善有るべしとの御氣色にて。猶も長田を御階近く召され。汝朕が命を重んずと雖も。正しく主人と婿を討つ事天罰輕きにあらず。其の罪

を償はんには義朝が思ひ者。常盤の前と云ふ女幼き子供有りと聞く。尋ね出し守育てせめての恩を報じなば。妻子を勞る志草の蔭なる義朝も。仇を忘れて。自ら汝が冥加

となるべきぞと。漏るる方なき院宣の恵は賤が伏屋まで。實に明王の聖徳に。譬へて云はば此の春の民こそ。御代の。三夏。心なれ。フシ爪木には。地取残されてありながら。登さは變らで常盤木の。浮世の力。フシ落葉ふる。地下の醍醐に知る由して忘れ形見の涙の種。義朝公の佛は三人の子に慰み。今若は九つ乙若は六歳さて牛若は三歳にて。まだ乳離れぬ。懐にステテ包む涙の世も狭く。フシ宿も薙に埋れり。地いたはしや今若父の別れの涙の隙。竹馬取つて打乗り。調敷き給ふな母上様。おつつけ。某平家追討の院宣を蒙り。まつ此の如く馬に乗り大軍を引率し。地父の敵清盛を討取るは今この事。源氏の大將今若が武者振御覽候へと。庭の面二三遍乗廻して立ち給へば。乙若小弓に小

矢をはけ赤き絹を筈に掛け。彼こそ平家餘
さじとよつびいてひやうど放ち。嬉しや平
家を射留しと勇み給へば牛若は。母の膝よ
り這下りて彼赤絹を。すん／＼に引裂き喰

裂き兄弟三人打悦び。平家の赤旗打取つた
り。勝鬨揚げよゑい／＼おうとラシ手を拍い
てぞ笑はる。此地の人々の二葉より剛な

るこそ理なれ。成人の後六十餘州を靡かせ
源氏の光を輝かせし。右大將頼朝蒲の冠者

範願。九郎判官義經と歎此の兄弟の生先な
り。常盤夢ともわきまへすなう恐ろしや壁

に耳。左手も右手も平家方源氏の一家は皆
亡び。あるにかひなき世の中に若しも平家

へ漏れ聞え。如何なる憂さか重ぬべき。今
日より左様の悪戯せばコレ。つめ／＼する

ぞと意狀だて牛若を撞抱き。今若も乙若
も今日は何とて手習せぬ。未だ手本をあけ

ざるか。地はやく／＼寺への給へば。あつと
答へてしを／＼と編笠被き手を取りかは

し。立出で給ふ後姿常盤御前は見送りて。

可憐の有様や頭の殿の在まして。世が世な
らば供人よ馬よ興よと云ふべきに。一僕を
だに伴れさせぬ彼が源氏の總領の。成る果

かと計りにて。フシ伏沈み。てぞ歎かる。地
然る所へ長田親子大勢引き具しどつと入

り。調夫こそ常盤餘すなと牛若諸共引立つ
る。地常盤御前は聲を上げ長田とは己れが

事か。主を殺し婿を討つ非學非道の罪人よ。
汝は鬼畜か木石か妾は命惜しからず。子供

を助け得させよや。一つは其の身の祈禱ぞ
とスエテ前後不覺に泣き給ふ。調長田打笑ひ。

尤も帝より妻子は有免との仰なれども。清
盛公より根葉を枯せよとの御意を蒙る。サア

今若乙若を出せ。さなくば命を取るぞとい
ふ。ヲ、地己れが心に引當ててさもしくも

云うたりな。みづからも牛若も殺さば殺せ。
今若や乙若が行方はいはじと叫ばるれと聞
入れもせず搦め行く。神や佛も無き世かと
あさましくこそ。三重見えにけれ。フシ

是は扱置き。地爰に比命の藤九郎盛長とて

源氏重代の勇士なりしが。去んぬる保元の
軍に父を討たせ。幼少より流浪して北國に
漂へしが。力強く丈高く今年既に十九歳。

源氏亡びぬと聞くよりも夜を日に就いて都
に上り。七條朱雀義朝の。フシ御墓所に参ら

る。地向ふを見れば我が年記なる若者の。
直垂袴に太刀佩いて編笠傾ふけ盛長を。じ

ろり／＼とまもりゐる。調盛長不思議とよ
く見れば。古への寺友達義朝の膝元去らず

遊谷の金丸幼顔疑ひなし。地彼奴は義朝
の御最期まで御供と聞きけるが。長田を討

たずして逃げ来る卑怯者。詞をかくるも無
益なりと見ぬ顔して御墓に。花奉り水手向

け。生きたる人に云ふごとく。口惜しき御
有様や人らしき侍がせめて一人御供せば。

斯く暗々とは成り給はじ。調金王とかや云
ふ柏丁稚腫病者の腰抜の。人でなしと知り
給はず頼みに召連れ給ふ故。地不覺の御最
期是非もなしと堪忍ならぬ當言し。尻目に
睨む眼よりスエテ涙を。流し申しける。地金

王丸むつとせしがあらぬ體にて香花を捧
け。卒都婆に向つて口惜しの御有様や。

某が諫を御承引なく長田に心を許し給ひ。

果敢なく討たれ給ひしよな。當座に腹切つ

て冥途の御供と存せしかども。いや／＼死

は易し存らへて今一度源氏の御代と翻し。

御恥辱をすゝがんと斯の體には候へども。

若君達は御幼少御家人どもは散々になり。

有るかひもなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚浪

人して魂くだり。口先の廣言ばかりにて

臆病者の大腰拔。何の役にも立ち申さず。

源氏の御運の拙さよと。同じく尻目に睨付

け／＼詞をあらし申しけり。盛長また

御墓に向ひ。石塔に耳なく卒都婆もの言

ねばとて。抜かぬ太刀の高名腕無しの振磔

。草の蔭にてさこそ可笑しく思されん。死

を易しと申せども命を捨つる程ならば。長

田奴に羽はあらず討つに討たれぬ事や有る。

地さりながら武士と思へば恨も有る。牛馬に

劣りたる人外と思召せ。本意は某遂げ申さ

ん未來の妄執晴れ給へ。ア、南無阿彌陀佛
と云ひければ金王亦御墓に向ひ。御卵の中

にも巢守あるは尤かなく。親兄弟の兵

に似たる方なき孫外れ。夫ほど心剛ならば。

去んぬる軍に今の口ほどなど高名はせざ

りしぞ。軍と言へば逃足早く。いさかひ過

ぎての棒ちぎり木後の廣言腹の皮。逃吠の

犬侍。臆病々々とぞ笑ひける。盛長今

は堪へかね犬侍とは誰が事ぞ。金王聞きも

敢ず。又最前より其方が人外とは誰が事ぞ。

テ、澁谷の金王が事よ。テ、犬侍とは御分

盛長が事よ。盛長腹に据ゑかね。侍を捉へ

て犬とは如何に。今一言云うて見よと太刀

に手をかけ言ひければ。ヤア侍とは人がま

し。無益の太刀を抜かんより犬に似合つた

尾を振れと云ふ。ヤイサおのれ。侍ならば

など主の敵長田は討たぬ。五穀つぶしの

娑婆塞け。末を大事に思はずばおのれと爰

で死ぬべきに。命が二つほしいな。テ、我も

源氏の御末を貢ぐ者の有るならば。御分と

爰で死ぬべきに。命がも一つ欲しいな。
イヤ倅め見事我と死ぬべきか。テ、死にか

ねうかヤア討ちかねうか。誰をうぬめを。

地討ちたいな切りたいな。無念さよ口惜し

やと。兩方りきむ居合腰太刀の柄も搦けよ

と。握りひしぎ身を慄はし。互の心探りあ

ひ兩眼に血筋をはり。齒を鳴して睨み合ふ

フシ擬勢の程ぞ頼もしき。盛長かつらく

と笑ひ。ア、言ひがひなき狼狽者と死して

益なし。名將の御墓を腰拔どもに向向さ

せ。勿體なしと云ふ儘に一丈有餘の高卒都

婆。押取つて出でければ。金王續いて飛掛

り。君の標は渡さじと確と取つて引きとむ

る。日本中古兵揃へに選ばれて大力と名

にふれし藤九郎盛長白澤王の怒をなせば。

源平の其の中に強力の聞えある。澁谷の金

王昌俊獅子王の力を出しゑいや。／＼と途

ちあへば腕骨膝骨腰の骨。つがひくは唐

紅血ばしつて筋あがり。額の筋は脛へ下り

脛の筋は頭へのほり。五百五十の力瘤九條

の藤葛。松をからんで
 苦むせる巖に生ひ
 し如くにて。二人踏
 んだる足の下土五六
 寸くほみ入り。左手
 もちり右手違ひうん
 と云うて捻ければ、
 四方八寸の角卒都婆
 中よりふつつと捻切
 つて。小躍してばつ
 と退き。雙方睨んで
 立つたるは、フシ人間
 業とは見えざりけり。
 地しばし詞もなかり
 しが。一度に涙をば
 らくと流し。テ、
 頼もしし金王丸。心
 底現れたり嬉し嬉
 しし。疑ひし、フシ
 口惜しさよ。許して



くれよといひければ、
 そちが心も見届けた
 り頼もししく。最
 前の雑言も忠節のあ
 まり。免せく此の
 上は心を合せ。平家
 を亡ほし。頭の殿の
 鬱憤を休め申さんが。
 思へば拙き源氏の御
 運口惜しくは思はぬ
 か。無念には思はず
 や口惜しや無念やと。
 卒都婆投捨てつと
 寄り袖とくに絶り
 つき。怒れる顔容引
 きかへてメテ悲嘆の
 涙は堰きあへぬ。フシ
 まことの姿ぞ哀れな
 る。地然る所に六波
 羅の方より雑色警固



あたりを拂ひ。囚人なりと罵り來る人々木蔭に立隠れ。能く見ればこは如何に常盤御前に牛若抱かせ。數革に引据ゑ武士四方を取廻し。長田の太郎は太刀取にて瀬尾の七郎檢使と見えて。詞コレく常盤最早最期は極つたり。さりながら清盛公の御心に從ひ給はば。三人の若を助け御身の望も叶ふべし。一生の思案所いかにくといひければ。常盤盤涙の際よりも。ヤア自らは女なれども義朝の妻なるぞ。狼狽とばしいはずとも。早く首打て彼の長田めに喰付いて。本望を達せんと。あてに氣高きまなじりにてステはつたと睨みはら。くと涙は。

フシ玉を貰けり。地今は是非なし首打て長田承るも慄ひ聲。膝わなくと後に廻り。太刀振上けんせし所を盛長金王飛んで出で。長田が胸板蹴倒し主君の冥罰思ひ知れと。首搔落せば警固ども狼藉者と立騒ぐ。槍長刀おつとりく。朱雀の。野邊の草の原露を亂して。三重へ切結び。地切りほどき追ひ

むすび。數十人に手を負ふせ八方へ追つ散し。立歸つてさあ。くと常盤御前は子供を具し大和路へ落ち給へ。日本國は平家方此の金王は姿をかへ。土佐坊昌俊と名乗り密に勢を集むべし。地出來たく某は關東へ馳下り。武藏相模伊豆駿河上野下野安房上總。源氏譜代の兵どもそれにても叶はずば。八丈大島蝦夷松前鬼が島へ押渡り。蒙古蒙夷の鬼を集めて軍勢とし平家を易く亡さんヲ。尤々と約束堅き石塔にいとま申して立歸る風神。雷神厄神も取りひしぐべき勢は。鐘馗大臣獅子王の暴れたる。姿もかくやらん。

第二

地前の安藝守清盛の御前には。嫡子重盛宗盛を始め一門残らず伺候有り。未だ源氏の末類ども方々に忍び居て。常盤親子を奪ひ行き剩へ。長田の太郎を打取る事。如何なる大事か仕出さんとフシ評定。眉をぞ聳めらる。地時に重盛申さるゝは。詞たとへ源

氏の末類神にもせよ。大將義朝を滅す上は日陰者ども寄り集り。たやすく平家を滅す事及びがたし。されば易に曰く亢龍悔有り盈つれば虧く。地此の殘黨を討たれんこと事を好むに似て候。只義朝が三人の子供を密に探し出されて。流罪せらるゝまでに候と穩便に宣へども。清盛怒り甚しく常盤の前は女なり。子供は幼少遠くは行かじと。難波妹尾を大將にて。三百餘騎の追手を方々へこそ差向けらる。扱また彌平兵衛宗清に仰せ付け。不思議の者を搦捕れと在々舞々町小路。残りなく觸れければ當時平家の勢に。靡く草葉の蔭にだに隠るゝ。方は三重なかりけり。

常盤御前道行

フシ頃は睦月の。未つ方。春めきながら沓をかへり。袂の水柱時知らぬ常盤御前は常盤木の。木の下間に踏迷ふ。ステ夜深き空や世にあらば。今ぞ妹背の寝入ばな。フシ今朝はつれなくむく起に。フシ抱き膝して。

牛若の。夢をば母がふところに。フシオクリ泣寝入りせし。フシいとしさよ。今若はおとなしく。地あづまからけに腰巾締め乙若の手を引いて。先に立ちたる歩みぶり。小太刀佩いたる腰つきも。さながら父の。フシ御影か。と。涙になみだ。果しなく。しのびつけたる顔辭や。小オクリいとど。傾ふく笠の雪。打ち拂ひつゝ。フシ見渡せば。賤が門田に水菜摘む。東寺四つ塚鳥羽噺諸國の秋を積みかせて。御世の貢の牛車京の。なごりに。とろかば我が心も。打ちのせて送れ。見おくれ。フシ呼びかへせ。返らぬ水の泡沫に。初歌うたふ。初蛙。梅に。年とる鶯の。フシ實は雪に。たゞまれて。まだ片言の初音鳴く。己がさまぐ。春なれや。スエテ人の姿も若緑。竹田の里に來て見れば。小オクリ菟屋が。軒もかざり繩オクリ穂長。隠葉。ふほしにわけて門松。かけの小鼓や。愛敬有りける新玉の。年も若やくあしたよ。水は和ぐ柳は芽ぐむ。里も榮えましま

す。フシ萬歳。鳥追とりく。に。フシ春はにぎはふ。折からの。厄神参り厄拂ひ。ある氏は二つ三つ。まだ一つ身の縫あけに蘇民。將來子孫繁昌頭堅かれと。フシ石の華表の二柱。二人の親の。家苞や。小弓に添へし八幡山道すがらの參詣を。今若は御覽じて。是ぞ源氏の氏神に我が門出の吉相と。スエテ御手を合せ給ひければ。兄を見まねに乙若も牛若も。母君の乳房の上に手をあはせ。左候くくと愛らしさ。フシ父義朝のましまさば。いかに悦び。給ひなん。たぐひなき若どもを。母が袂の。地下にのみ。埋木となすべきかと昔を慕ひ行末を。スエテ思へばつきぬ憂き涙。フシ我が身一つの雨ぞかし。古人の浮名たつ。戀の百夜の深草山。オクリあまぎる。雪に雲くらくまで朝あけの心地して。三里にたらぬ玉鉾も。草鞋こぼり足こえ雪にも。おなじ墨染のさくららの寺の入相に。宿はなけれど里の名は伏見に。行きくれ。三重。給ひけり

フシ降る雪の。地おと聞く程に靜かなる。竹より奥の一つ庵。猫の通路あと付けし。たゞ一筋の道細く。スエテ。油火ほのかに揺立てて。女の業かしどけなき。引きさき紙を結びつぎ。半ばあけたる。フシ伊豫簾。嵐ぞ雪を。もて來る。地常盤御前はともし火の影をたよりに尋ねより。和太和へ下る女なるが。幼き者を召具して雪に道を失うたり。地一夜の情とありければ。十八九なる女房の紙觸か。けて豫に出で。親子の人をつくくくと打守り。いたはしの有様やお宿申したうは候へども。此の頃平家の沙汰として義朝のゆかりをつよく詮議の候が。四人々の有様咎めんは必定なり。自は白妙とて藤九郎盛長が妹源氏譜代の者なれども。不思議の縁にて平家の侍。彌平兵衛宗清の忍妻となり候。地今にも夫の宗清殿來り給はば。憂目をこそ見給はん情なしとな思召しそよ。妾が幸きはいとしさゆゑ何處へなりとも落ち給へといとねんごろの詞の色

フシ紙燭。

吹消し入りにけり。地常盤も今は頼みきれ。力も落ちて先へも行かれず後へとは戻られず。とても此の上は運に任せて兎も角も。今宵は爰に明さんと少し風よく軒蔭に。小袖の襖のうはがひを敷寝の床とかたしかせ。笠をならべて屏風とし昔は翠帳紅閨に。隣間の風も寒かりし。身は習しと身を捨てて兄弟に降る雪を打拂ひ打拂ひ。あはれとぶらふ小夜千鳥オクリないて

其の夜を更さるゝ、フシ間なく隙なく。心なく。雪はこぼすが如くにて。寒風颯々として。人の肌骨にしみ渡り肌を刺す事鋭き刃の如くなり。いたはしや母上は。つかれたる身を寒気に破られ。悪寒五體を苦むれば。ア、堪へがたやと伏しまろびヌエテ前後。不覺に見え給ふ。地今若乙若驚きなう如何にせん悲しやと。額を抑へ手をさすり。いかに乙若母上の寒からんに。物きせません尤と兄弟帯解き身狭なる。小袖を脱いで母上の。裾や枕に取重ね取重ね。

私は厭はで埋もるゝ、フシ雪の裸身あはれなり。フシ母は苦しき。枕を上げ。扱いたはしの子供やな。かばかり母を大切にいかに孝行なればとて。和御前達をこごえさせ。親も冥加に。フシつくるぞとよ。地子は息災に生立てて見するぞ深き孝行なれ。風ばしひくなく衣着よと着すれば脱いで母に着せ。いや我々は寒からず。侍の習ひには如何なる雪にも軍して。地よき敵と組まん時寒し冷たしなるととて。敵に後を見すべきか。寒いと云ふな乙若。寒いと思すな兄上とかひくしけにいふ聲に。牛若目さまし這ひ出でて見るを見まねに衣をぬぎ。同じく母に著せ參らせ。手足もふるひ凍ゆれど其の色見せず齒ぎしみし。拳を握り堪ゆる體母は氣もたえ目も眩み。ア、情なやあさしや。百萬餘騎の大將軍とも仰がるべき若どもに。一重の衣を着せかぬるは如何なる神の咎めぞや。いとほしの人達や御身たちが志。綾錦より厚ければ母は着ねども暖か

なり。ふびんの者よこち寄れと三人一所にかき寄せて、フシ抱き。伏してぞ泣き給ふ。ことわり。とこそ聞えけれ。地月も夜半に更行けば彌平兵衛宗清。女の庵に忍びしが雪にうつろふ人影は。何者か怪しやと傘かさしよく見れば。常盤親子にまがひなし。網代の魚ごさんなれあまさじと身づくろひ。なほも事をうかふにぞ慈母のあはれみ。孝子の振舞。さすが源氏の根ざしなりいたはしさよあはれさよ。地今人々を助けしとて。源氏の運の未ならば終には捜し出さるべし。地たとへ搦捕つたりとて。盡きんす平家の御果報の長久にもよもならじ。なきけ知らぬは匹夫の勇。殊に我が妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしがイヤ待てしべし。地主君清盛の御眼識を以て仰を蒙り。助けては道た、す。地搦捕つては情なしとつまつまじつ思案して。さあらぬ體にて戸を叩けば。女房待ちかね柴の戸の。雪打拂ひ草鞋もオクリとくゝ、地庵へ伴ひけ

。地今宵は殊なう冷え候ふ先づ盃と暖めて。暫くさいつさゝれしが女房申しけるは。詞なう宗清殿。みづからは源氏御身様は平家。若し只今にも養朝の所縁とならば。如何し給はんとよそながらこそうらどひけれ。宗清扱こそと思ひ。ヲ、云ふまでもなし主君清盛の仰なれば。いかに汝が主なるとして用捨はならず。眼にかゝらば搦捕つて六波羅殿へ引立つる。地只何事も見ぬが佛聞かぬが花と答へしが。親子の人々物ごしの手取るやうに聞えしを。女房はつと思ふ顔宗清氣をつけ。詞やれ小鳥どもの軒に宿りてかしましきに。あれ追拂へと云ひければ。地なう情なやふくら雀の羽を惱み。雪に折れ伏す篠竹の笹に一夜のかりの宿。さのみにいたくな宣ひそ。はや夜も更けぬ床寒し音せでお寝れとすゝめける。詞いやゝ某は殺生好。鳥の聲を聞けばとらではおかず。是非追拂へと云ひければ女房更に合點せず。夜な夜なとまる小鳥な

れば追うても打つても立たぬといふ。宗清心氣を沸しエ、不合點な。地いで某が追退けんと弓矢取つてかけ出づる。女房は人々の影隠さんと引きとむる。もぎ放し突退けて空矢四五本さしつめく射る音に。常盤驚き兄弟をまへうしろに掻抱き。フシはふく逃退き給ひける。地宗清とつくと見送りて。詞あれ見よ女房雀ともが逃げつるは。其の儘おきて某が殺生し。あの雀を殺させて汝が忠節立つべきか。只何事も見ぬが佛聞かぬが花今合點いたかといへば。地女房とかうの言もなく。あら頼もしやとばかりにてステ袂に縮り歎きしが。地扱過分なる御心とかう詞に及ばれず。連添ふ男に目がくれて主殺しと云はれんも一門の名折なり。又おの様に逆ひても本望にも候はず。如何と案じくづ折れしに有難き御了簡。斯ばかり深き御恩賞親にも子にも兄弟にも七珍萬寶の寶にも。男一人はフシかへぬぞや。若君達も常盤様も此の恩忘れ給はじといへば

ア、く暫く。詞常盤と云へる名を聞いては。清盛公の御前にて某が誓文立たず。地いつまでも雀々見ぬが佛聞かぬが花と。うなづき合ひし弓取のフシ妹背のわけぞ頼もしき。地藤九郎盛長は人々に行逢ひしが。宗清が放つ矢は妹が二心か。いぶかしく庵に立ち事のやうを聞届け。横手を打つて涙をはらくと流し。爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底によつて妹を刺殺し。御邊と勝負を決せんため是までは来りしが。地只今の志生々世々に忘れがたし。一禮のため對面せんと云へば宗清からくくと笑ひ。詞又斑變の雀が來つてよしなし事を囁るよな。某平家の扶持を蒙りながら。源氏方の禮をうけ此の宗清が立つべきか。エ、狼狽たる羽拔鳥。地左手も右手も狩人の追鳥狩の網高し。鷹にとらるな餌差にさゝれな。古巢の雛を飼育て初音を揚げよと云ひければ。盛長悦び合點しヲ頼もし、田の面の雁。春は越路

に立歸り源氏一味の友千鳥
 大將軍の羽翼の下揚けたる
 族は白鷺や、群居る鳥の翼
 を鳴らし會稽の巢立して。
 上見ぬ驚の譽を見せん尤。
 尤愈けや愈け山鳥の尾のし
 だりをの。長居は恐れお暇
 と夕告の鳥が啼く。あづま
 路指して飛ぶ鳥の飛ぶが如
 くに下りける心はさすが大
 鳥の。千里一はね源氏の運
 末たの。もしうを聞えける。

第三

實にや三百六十日曆々と卷
 盡し。既に承安三年と移る
 月日は程もなし。平家の驕
 日に榮え。清盛既に太政大
 臣を経て入道し淨海と法名
 ある。嫡子重盛内大臣。二
 男宗盛中納言右大將。其の



外末子^{はつし}末葉^{まつば}残らず^{ひき}稀有^{くわん}の官職^{しやくせつ}。攝家^{しやくけ}華族^{けわしゆく}にことならず。

爰に三條烏丸烏帽子屋の五郎太夫とて、烏帽子折の上手を召し。位々の烏帽子冠いひつくれば、則ち出來致せしと、フシ西八條に持參する。地一門よろこび着し給ひ御悦び事終り。五郎太夫に祿賜はり清盛入道仰せけるは、御先年義朝が子供討つて捨つべかりしを池の禪尼の申すに依つて命を助け。今若を伊豆の國蛭が小島に流せしが、密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり。當家追討^{おひた}の院宣を乞ひ望むよし風聞す。地又弟牛若も成人し。京近邊に忍び居て院宣を望むと聞く。然らば頼朝



も牛若も法皇より。密に位を賜はり烏帽子
冠 求めんは必定なり。随分氣を付け見な

れぬ者烏帽子買はんと云ふならば。早速に
注進せよと宣へば。長田の庄司進み出で。

これ五郎大夫かりそめの事ならず。油断
なく詮索し某まで知らされよ。此の者ども
を注進せば御褒美にあづかり一代浮み上る

事。長者になるぞせい出せ。エ、何がさて

く身の爲といひ御奉公油断は致さず候と
御請を申し罷立ち宿所に。こそは 三夏へ

立歸れ。フシ春の光を。烏帽子折。地五郎太
夫がひとり娘に東雲とて十五歳。職人なれ

ど烏帽子屋はお公家交はり上びたる。しよ
ざいに連れて氣も至り都は戀の名所とて。

自らなる。伊達心フシ町には惜じき姿なり。
今日は吉日商よし棚飾らせて賣初に。細工

の仕初祝儀すぎ乳母婢を招き寄せ。春の遊
びも今すこし今日は羽子突き遊ばんと。腰

元呼びて遣羽子や。彼方此方へつくばねの
オクリ峰より落つる。歌籠の白玉ひとふたみ。

よう舞ふ小羽子。外へきるゝな。それゆく
な。マドリ羽子さへも。袖にとまりて情は。

厚き羽子板のえにしに似たる我が中よ。夏
瘦もせず敷もくはぬ年の數々フシ面白や。地

すむかひもなき世はつらし牛若君十餘年の
霜雪を。鞍馬の山にふみわけて十六歳に

なり給ふ。秀衡を頼み奥州へ下らんとと思せ
しが。間わつばとあらば平家より搦めとれ

との沙汰きびし。地元服して男になり下ら
ばやと思召し。都三條烏丸。大夫が棚に立

寄りて烏帽子買はう。なう。フシ烏帽子買は
んと仰せける。地女子ども聞きもあへず。

飾りたる烏帽子の内何れか所望候ぞ。よ
きもあしきも空價なし。望み次第に召され

よとしほも無く答ゆるにぞ。地はや東雲は
牛若に引かれて廻る戀車。わりなき思色に

出でなうきごつなの人々や。詞商といふも
のは賣るにも買ふにも品ぞ有る。地御用あ

らば妾にとちよこくとお側に寄り。烏帽
子は何が御所望ぞや御容色はよし風はよし。

見る人我をや折烏帽子戀に意氣地を立烏帽
子。此のお姿にわけ知らぬ我も心を懸烏帽

子と。背中をとんとうつつなや。しんきと
ばかりいひさして。フシ顔差入るる襟深し。

地牛若君も色なれぬ鞍馬の山の深山水の。
花珍しくむつ折れにくわつと赤らむ顔をあ

け。誠にやさしき詞の縁今日が情の初冠り。
あはれ人目のすき額風折烏帽子折もがなと。

手を取り給へば東雲も氣も魂も揉烏帽子。
かけ緒の紐のもろ結び解けぬ思ひとなり

けり。地かゝる所へ五郎大夫立歸り。こは
何事と言ひければ娘は慌て、うろくくと。

烏帽子召されよ父上と大夫が頭にかづがせ
て。フシうろたへまはるをかしさよ。地大夫

牛若を一目見て。してやつたりと腹をも立
てすにつこと笑ひ。詞ム、お若衆は烏帽子

が御望みか。好みはなきかと問ひければ。
牛若聞き給ひ扱は御亭主候な。此の童が着

ようずる烏帽子は。大鑪の頬を荒らかに一
くせみくせませ。ひながたに間をあらせ揃

形を殿々と。雙眉つけて左折が所望とある。

地太夫案にたがはずと思ひながら。猶も試

し見んと思ひ。詞あら似合はぬ好事や。當代

左折を召さうする人は。一年野間の内海に

て失せ給ひし左馬頭義朝か。其の御子意源

太義平。二男朝長三男頼朝。扱は鞍馬にお

はします牛若殿とやらんこそ。左折は召さ

れうすれ平人は及びなし。但し少人は由緒

ばし候か牛若をかしく思召し。身には系圖

のなければども若しも答むる人あらば。地都

の宿に古き烏帽子の有りつるを。所望して

着したり。左折も右折も。此の冠者は知

らぬなりと。脱ぎ捨てて。通るならば。御

身の難も有るまじ。童が科も。通るべしひ

らに。フシ所望と仰せける。地五郎太夫は

しすましたり。牛若に紛ひなしと心の内に

悦び。詞其の義ならば出来合は候はず。今

宵の内に折立てさせん一夜は是にと云ひけ

れども。地いや只明日参らんと。立ち出で

給ふを東雲袂を引留めて。父もお宿と申さ

る。こそ幸なれ。烏帽子も折つて御祝儀も

取りはやして参らせん。是非にとあれば牛

若も。なさけの絲に繋かれて。フシ岩木に有

らぬ風情なり。地太夫いよく。笑を含み。

でかいた東雲年の始の商丹那。随分御馳走

申せやと口には云ひて心には。たつた今揃

り。山も見えぬ胸算用六波羅さしてぞ三

思。急ぎける。フシいつの間にかは。たが掛

橋の思川。はや宵の間に深くなり。ステも

らさぬ水はあひほれの。フシ淵も。磯とぞち

ぎらる。地其の夜も更けて東雲は左折に

小結をゆひ。御烏帽子出来たりみづからは

殿始。おの様は烏帽子始目出度く閨にて御

祝儀あれと。瓶子に盃取りそへて。フシ御

前にこそ直しけれ。地牛若御覽じ扱々うれ

しき情のほど。詞今は何をか包み申さん某

は。左馬頭義朝が八男牛若丸。地平家を滅

し源氏の代となし此の思は報すべし。さり

とても世にあらば日本國の諸大名。悦びの

色をなすべきに。口惜しの次第やとステ御

落涙ましますべ。地扱は左様に候か。御い

たはしうこそとばかりにて共に袖をぞ絞り

ける。牛若重ねて我が先祖義家は。八幡に

て元服あり八幡太郎と名のり給ふ。地我も

是をかたどりて烏帽子親は正八幡。鞍馬の

大悲多聞天。太刀と刀を八幡多聞と觀念し。

床の柱に立て置きて我と烏帽子を取つて戴

き。太刀の前にも三々九度。刀の前にも三々

九度。直に土器頂戴し。扱名は何と付くべ

きぞ。チ、九郎冠者源の義經と付け申さん。

源氏の御代は千秋樂萬歳樂とくりかへし。

ひとりごととして祝はる。フシ御有様こそあ

はれなれ。

烏帽子折名づくし

地東雲つくく。見参らせ。御元服を祝はん

と奥の一間につつと入り。かねて用意やし

たりけん。あまたの烏帽子掛に様々の烏帽

子を着せ。色々の装束を打掛けく。人の

如くに拵へて御前にならばさせ。詞なうお

折子帽烏氏源

目出度や關八州の諸大名
 御味方申さんとて。手勢
 くを引きぐして御悅に
 参りたり。地末繁昌の其
 のしるし御酒一つとぞ祝
 ひける。ワキ闘牛若ほとん
 ど御悅喜あり。實にめづ
 らしや面白や。地頼もし
 や東路は。源氏よしみの
 梓弓。取傳はりし武士の
 オクリ假名は如何にとの
 たまへば。シテ地姫は烏
 帽子を打ちかづき。是は
 伊豆國北條の四郎時政。
 一門榮え類ひろし。數な
 らねども某が。御味方と
 申さんに凡そ近國に残る
 武士は候まじ。手勢は限
 り知られずと。ワシ謹ん
 でこそ申しけれ。ワキ次に



坐せしは梨打鳥帽子。直
 垂著流し太刀佩いて。さ
 もおほやうに見えしは如
 何に。シテさん候某は。
 島山のなにかし秩父の庄
 司重忠。若武者の昔より
 刀業を好んで。大船を跳
 返し龍車を留むる勢有り
 り。四相を悟る自然智は
 フシ我さへいさやしらつ
 ゆを。玉と欺く。はかり
 ごと。ゐながら萬里の敵
 を察し。戦はずして勝利
 を得。天地を動し。鬼神
 を感ぜしむるなる。文武
 を雙の翼の臣。手勢合せ
 て六萬餘騎御先手とぞ
 フシ答へける。ウキ續いて
 なみ居し人々は。遊鷹帽
 子に大紋の袖たぶ。く



とかき合せ、さものしけに描ひしこそ土肥か小山か梶原か、フシ其の名ゆかしとの給へば。シテそも、是は。宇多天皇の後胤佐々木の太郎。同じく次郎三郎盛綱。四郎高綱五郎吉清候なり。次に伺候す風折烏帽子。後高に着なしたる。本國假名はいかにく。シテコハリこれこそ三浦の旗頭。和出の左衛門義盛年つもつて六十六。軍に逢ふ事十五ケ度。一度も不覺の名をとらず老木の。枝は。地たゆめども。心の。櫻はなやかに。榮えん君の御出世を。千代萬年と壽きて九十三騎の類ども召具し參上仕る。ワキ末座に控へし懸烏帽子。素袍袴に大太刀佩き、殊にすぐれて見えたるは、是も三浦の一黨ならめ。シテ實によく御覽じ候ひし。われ義盛が三男朝比奈の三郎義秀。色黒く手足あれ。ワキ覺さはりの荒男。シテ茶の湯連歌は不得手なれども朝比奈が。ハル癖として。敵と見て勇む事。荒鷹が雉子を。見て烏屋を。潜るにことならず。たとへ平家くろがねの。城を構へ石門に籠るとも。フシ片手に取つて押破り。地清盛父子を始とし撫斬。胴斬。拂斬。將棋倒しに攻滅し。源氏の御代となし申さんと辯舌に淀みなく。それにくに答へしはフシいさぎ。よくこそ聞えけれ。爰に長田は五郎太夫が注進にて其小冠者何事かあらん。抜驅して討取らんといきりきつて來りしが。障子の際より遙に見れば。烏帽子直垂着流して大の男數十人。地和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に長田の庄司はつとわなき氣を失ひ。空おそろしく胸慄ひ足も腰もわなくと。フシ前後を忘するばかりなり。調太夫きつと見おくれ給ふか庄司殿。踏込んで一討に遊ばせといへば。あれを見よ鎌倉勢が雲霞の如し。こちらが細工にならぬと云ふ。太夫驚き覗きて見れば。地案のごとく兵士數多列坐せり。あつと言ふよりふるひ出し。二人はひよろくくうろくとフシふるひて何の埒もなし。地いづくにてか金王丸此の由を聞出し。飛ぶが如くに断付け案内まうと呼はつて二王立にぞ立つたりける。調長田味方と心得。駈出で見れば金王なり。ハア地南無阿彌陀佛と地にひれふし。フシ穴へも入りたき風情なり。地太夫奥にうろつきしを飛掛つてしつかと挿れば。長田表へ逃んとす同じく取つて伏する間に。牛若姫諸共奥より立出で給ひける。調太夫聲をあげ我等は何も料は無し。烏帽子が御用に候は。おまけ申さん召しませいと慄ひくひけるを。ヲ、サ某が烏帽子は。鐵の五枚兜鑲形うつて龍頭。鐵の付いたる烏帽子が所望ぞ。己れ助くる者ならねど娘が心を察し命ばかりは助くる。地腰骨どうと踏み折れば泣くくゝるざり助かりぬ。調是長田某は今法體し土佐坊昌俊と名乗れども。金王丸といつし時うぬめを漏せし無念さに其の時の姿を残し四十になるまで此の前髪。地今こそ落せ是見よと。附髪かつらを取りしより土佐坊とこそなりにけれ。今殺すはあつたらもの關東

へ連下り。頼朝の御前にて弄殺にすべし
とて高手小手にからめつけ。扱源氏御出世
今日の御祈禱に。千秋萬歳所繁昌ひとさし
舞はう目出度やと。三番叟の烏帽子を着し
袖をかざして。色詞ハ、アおさへてく。
思ふ敵を取つて押へて。源氏の御代より外
へはやらじとぞ。地思ふと若君を祝ひ参ら
せとうく、東へ御下りおはしませ。扱某は
都のやうだい聞きつくろひ。跡より追つ付
き奉らんと勇みに。勇める有様は。只焚暗
も斯やらんと恐れぬ。ものこそなかりけれ。

第四

地彌平兵衛宗清は、妻の白妙源氏の由縁あ
る故に。頼朝兄弟の命を助け参らせしが。
其の身平家の譜代なれば生中に事むぶかし
。源平分ち立つ迄は暫く身を退き世上を見
んと去年の秋より病氣といひて奉公ひき
養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く。野山巡
ればおのづから心浮かる、飄箆に。酒など
入れて腰につけ觀音巡り寺社の椽、花の下

陸行暮る、其所を其の日の極樂と。物にか
まはぬ身の樂は。フシ命も延ぶる姿なり。地
かゝる折から十五六なる公達。繁縫の大口
に左折の小結着て。直垂の袖にて顔かくし
忍ぶ振にて通りける。夫婦きつと目くばせ
しつ、と寄つて袖をひかへ。詞是申し。御
姿紛ふ所は候はず。源氏の大將牛若殿と見
かけたり。某は平家の兵、彌平兵衛宗清申
すべき仔細あり。名乗らせ給へと小聲にな
つていひければ。少人聞きも敢ずア、某こ
そ牛若よ。定めて我を探すらん今は遁る、
所なし。はや首討つて清盛に見せ。高名に
せよと、フシ涼しけにして居られけり。地宗
清手をうち園生に植ゑても紅のさすがなる
御振舞。詞全く君を討奉る心ならず。是な
る者は我が女房白妙と申して御家來藤九郎
盛長が妹。其の由縁によつて先年御幼少の
時分。伏見の里にても御兄弟を見のがし助
け奉りし。今とても某世間の唱へも候へば。

き。地心安く落し申さんといへば。少人聞
き給ひ然らば明けて申すべし。我牛若にて
更になし。烏帽子折の五郎太夫が娘東雲と
申す女なるが。親にて候五郎太夫窓に目く
れ訴人せしを。澁谷の金王入道土佐坊の働
にて。若君も恙なく長田も生捕り給ひしを。
父の太夫が弟妾が爲には叔父坊主。吉峰の
雷玄法師重ねて平家へ訴へ。詞監物太郎頼
方が手勢を以て。雷玄法師が加はり東路へ
追手をかくるよし。地妾は君が一夜の情。
我牛若と名乗り追手に出合討たれば其の
隙に若君様一足なりとも落ち給はん。親叔
父の悪心も妾が露の志とステテ語りもあへず
泣居たり。地宗清夫婦感じ入り。其の義なら
ば女房そちは此の姫と同道にて。随分追つ
付き御供せよ。某は爰に残つて追手の大將
監物太郎に出合ひ。詞長咄を仕かけ邪魔を
いれん。其の間に早々落せといひければ。
地白妙悦び然らば妾も身を扮さんと。夫の
羽織に編笠かづき。東雲を先に立て。フシ跡

を慕うて追ひかくる。地案の如く追手の大將監物太郎手勢引具し馳來る。宗清屹度見これくくく。監物太郎頼方にてはなきか。あわたしき體何處へゆくぞといひかくる。頼方振り返りヤア宗清か。我は今日源の牛若が追手の役を蒙り。是なる訴人は烏帽子屋の五郎太夫が弟雷玄法師。則ち彼が案内にて只今急に追駈くる。其の方どと。地ねが合ひ引合ひとむれば。監物は病氣とて樂をする義ましと。言捨てて駈出づるを先づ待てと押し止め。夫は近頃太義千萬。さり乍ら侍は息災にて。奉公するこそ手柄なれ。随分ほつかけ牛若を討留めて御加増に預り給へ幸ひ酒を持合せたれば。地門出祝はん先づ一つと腰の瓢箪取り出せば。地是は誠に氣が付いたり然らばお辭義申さぬと。引受けく我も三盃。雷玄も三盃御亭主も三盃。合せて三々どうはお禮申さぬと又駈出づるを。地はて扱監物呑吐するは手が悪し。地此の頃久敷參會せずしばしは積る物語。今少しとぞ引留むる

監物重ねて。時折も折大事の追手に行く者に。咄せんとは譯もない爰を放せと引き放す。はてさう堅ういふな新しき咄ありちよつと咄さん聞けといふ。監物すこし腹を立て。泣く子も目あげ咄どころか。其方がやうな隙ではなし重ねて聞かんと逃けてゆく。いや咄掛つて話さでは置かぬほどと。地ねが合ひ引合ひとむれば。監物はうどもてあぐみ。地さあちやくくと咄さば咄せと。不承顔にて聞き居たる。フシ心意氣こそをかしけれ。宗清どうど座をくみ。是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞き給へ。武士たる者は後學と仔細らしく聲作ひ。地昔々或所に。爺と姥と有りけるに。爺は山へ柴刈に姥は川へ洗濯にと聞きも果てず。地エ、爰な者は餘り人をたわけにする。酒に酔うたか宗清。地相手になるな軍兵ども急げくと振切つて。フシ跡をも見ずして走り行く。宗清聲をあけ。大事の咄の妙しのめ諸共に。左手右手に引つ添うて腰を折る先づさきを聞け監物。猿の面は眞赤なと笑ひてこそは。三盃別れられ。地御曹司牛若は江州土山まで落延び給ふ所へ。白妙しのめ追付いて雷玄法師が訴人にて監物太郎追駈け申すを。宗清道にて長物語を仕出さん。其の間に一足も早くくと言ひければ。地牛若けにもし悦び宿を出はなれ給ひしに。頃しも春の雪氷とけて流れて出村川。水嵩増つて波早く越すべきやうのあらざれば。よし此の上は如何せん運は天に有明の月のよすがら爰にとて。田村の宮の拜殿に。フシ暫く休らひおはしける。地監物太郎頼方は宗清が長咄。よしなき隙を入れけると足をも付けず打ちければ。はや土山に着きけるが。田村川の水高し此の邊にこそ在りつらめ。関をつくつて脅がし搜して討てや者どもと。十方に入亂れ關の聲をぞ三盃揚げにける。フシ今は遅れぬ。地所ぞと源の牛若丸爰にありと駈出で給へば。白

弟子殊に方人有りけるぞ。地侮つて怪我するなと八十餘人の追手の勢群つて掛りしを三人飛鳥の身も軽く飛びこえ。跳越え踊越え花を亂して、三重へ戦ひける。フシ女童と。

地云ひながら一人當千の剛の者。入りかへく追立つれば。平家の兵斬立てられ。フシ戦しらんで見えにけり。地雷立法師たまり

かね牛若は兎も角も、親叔父に逆ひたる女めこそ面憎けれ。擲殺してくれんすと大手を擴けて駆廻る。しの、め薙刀おつ取りの

べ是叔父坊様衣の手前も有るぞかし一門の悪心を。教化こそせられずとも人の訴人は何事ぞ一子出家すれば九族天に生ると云ふ

御身は引きかへ六親を地獄に墮す大惡僧ヲ、結構な御出家サア。地口惜しくば寄つて見よと薙刀ひらめかせば。雷立坊甚だ

怒をなし。惡心却つて大善根。事も知らで出家をもどく己れこそ罪人よ。地賽の河原の石子詰と神前の栗石を。おつ取りく磔

打雨や霰と投げかくる。しの、め薙刀胸に

なし。飛びくる石をはら／＼はらりはらり。三重へきり拂ひ。地八方に打拂へば身にはあたらず飛返り。敵の眞甲裂口鼻筋首筋頭の鉢。散々に打割られわつというて逃

け散りける。調白妙少し代らんと逃行く敵を追懸けしに。頼方が郎等卜部の新七取つて返し渡り合せて切り合ひしが。太刀を捨ててむずと組む白妙につこと打笑ひ。女と

思ひ悔るな盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付くはずこびたる。徒者生けしは我が道立たすと。地いふより早く掻潜り襦取

りして跳返し。隙なく首を討ちたるは。フシ瞬きならぬ早業なり。地討残されたる兵どもをめて懸れば牛若丸。ものものし葉武

者ども一人も餘さじと。獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手をくだき隠れ。現れ陽炎稻妻水の月手にもたまらず。三重へ防がる、地

雷立頼方左右より隙間なく攻めければ。地鳥居の笠木に飛上りから／＼と打笑ひ。な

う追手の人々。其方は大勢味方は僅三騎な

り。地しばし休み申すぞと左り扇でおはしける。頼方あせつてもがけどもすべき様のあらざれば。遠矢に射取れと打ちつがひ。よつ引いてはたと射れば側なる松にひらりと移る。二の矢を放せば心得たりと元の鳥

居に飛びもどり。地梢の猿の枝うつり。フシ振舞ふ蜘蛛の如くなり。地雷玄今は堪りかね惡僧が思案候へば。鳥居も松も搦倒さん

と土民の家なる鉄おつとり。調柱の根際に打立つる牛若笠木に兩足かけ。宙に下つて

雷立が眞甲をしたゝかに切り給へば。南無三寶と逃けて行く續いて飛びをり取つて引据ゑ。御坊にくどい教へなれども釋迦に經

といふ事あり。生きて恥を曝さんより牛若が引導にて。成佛せよと拜打ち頭より聲まで左手右手へぞ裁ける。大將頼方怒をな

し。女童に是程まで切立てられし口惜しさを。地一騎も残らず討死せよかかれやかと恥しめられ。むら／＼と寄せかくる夫

こそ望む所よと。又三人が引返し捲り立て

捲り立て息をもつがせず追ひ立つれば。四十餘人殲伏せて生残る者までも。半死半生敵はじと田村川に飛入りくく、フシ淨きぬ沈みぬ漂ひける。御牛若御覽じてテ、面白しく、地人役、ごさんなれとて三人手に手を取りくみて。流る、武者の頭をふみ。肩を踏まへて飛越え。く向ふの岸に駈上りテ。骨折く御辛勞。關東勢を引率し重ねて一禮申すべし。門出よし吉凶よし天氣もよし道もよし萬世の中義經が。天下を治ん瑞相と悦び。東に下らるる。

第五

地君が代は千代に八千代に榮えます豊旗雲や伊豆の國。蛭が小島におはします右兵衛の佐頼朝は。盛長一人配所の伽。密に平家追討の御企しきりにて。關東の諸大名内々志を通じ參らすれば。やがて武運も開くべきフシ。蒼る花の匂ひ有り。地然る所に上方より澁谷の金王參上と申しける。頼朝悦び珍しや金王丸。おことは法體しけるよ

な。法名は何とか云ふと宣へば。さん候昌俊と申す名兼字を其の儘に。土佐坊昌俊とついで候。して上方に別條なきか。九郎は如何にと仰せければ。土佐坊承り。されば候上方は平家の驕十分にて。こほる、水の源の君御出世を松の葉と。萬民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に。幸なれば伊勢大神宮へ御參詣有るべきよし。拙者は君への御土産に生香を持參致せし故損せぬ内に一刻も早く御覽に入るべき爲。先づ御先へ下つて候と申せば。地我が君も盛長も。土産の香は何ならんとくく。とぞせめ給ふ。近頃輕微の至りながら。野間の内海大網にて取漏したる大悪魚。御賞。既遊ばせよと長田の庄司を引出せば。地頼朝大きに御悦喜あり父義朝の命を取りし。北枕の毒の鯨今我が爲には日出。釣つた所は心地よしと。フシどつとどよめき給ひける。地時刻移さず料理せよと長薙刀を賜ひければ。承ると土佐坊薙刀取りのべ小踊して。首ふつ

つと搔落し宙に上げてちやうど受け。切先に貫き見參に入れ奉り。軀は島の水底に柴漬けにせよとて。下部に下し行はれ御悦びは限りなし。此の事北條へ聞えければ。時政の北の方より女房達を使にて。色々の絹八重がさね御祝儀に進上有り。頼朝御覽じ時政夫婦の志返すも嬉しさよと若松摺つたる小袖を肩に打ちかけおはしました。鏡臺引寄せ我が御顔つくく。と打守り。抑某清和天皇の臺を出で。六孫王經基より滿仲頼光に相續いて代々天下の權をとる。地我其の血脈を繼ぐべき人相よのつねに變り。喉骨の生れ有り。左右の肩は八幡の八の字。兩眼の瞳には月日の光。額の黒子は屬星木曜星。頭の辻には天照皇大神五體を守護しおはしました。一度天下の將軍と仰がるべき相あらはれたり。如何にくと宣へば土佐坊を始め使の女房若黨等。けにも仰に違はじと。フシ一度に頭を傾ける。地盛長は返答なく事をかしけに顔しかめ。空

嘯いたる其の風情鏡に映れば頼朝氣色を損じ。嗣後きたなし盛長只今の面つきは。全く頼朝を侮つての振舞近頃奇怪千萬なり。

左程頼みなき頼朝に仕へんより。頼みある人に奉公せよ罷立てと宣へば。盛長涙をは

らくと流し。地こは口惜しき御誼や候。末頼み有る主君とて御奉公仕るを。忠節と思召さる、か。頼みなき主君を守立て。

勤むこそ臣下の道とは申すべけれ。地然らば君の御心には。頼みなき下人として見放し給

はん恨めしさよ。其の御心ゆるにこそ源家の嫡流として。平家に世をせばめられ。い

ぶせき配所の御住居。中々末の御出世も覺束なう覺え候ぞや。口惜しの御所存やとスエ

テ涙に咽び申しければ。君を始め人々もけに忠臣の金言。心有りける諫やとッシ皆感

涙をぞ流しける。地頼朝あくまで感じたまひ。此の上は萬事をやめ平家を亡す軍感こ

そ肝要なれ。聞けば牛若は伊勢參宮したる由。地北條が侍どもを狩催し。汝は迎ひ

に登るべしとくくとのたまへば。盛長仰を蒙りて御坂迎と。三重聞えける。牛若宮めぐり

フシ是は扱おき。御曹司牛若は。東雲を誘ひさもはなやかにて參宮有る。フシオクリ

御威勢。こそは。フシゆ、しけれよの。木綿幣ちらす神風や。伊勢の宮立物古りて。

外宮の森はしんノと。フシ神さびわたるた、すまひ。昔覺えて。フシやすらかなるこ

そ殊勝なれ。太夫扱彦宮の御祭禮。ッキ數の奉幣事終り。太夫是こそ伊弉諾伊弉册の

尊。御國護を仕給ひし。あまてらす。三人ッレおはんがみ。事も愚や御本社は。餘の御

社に事かはり。丸木柱に茅の屋根。供物は三杵。小オクリ宜禰がシバカキ神樂を參らす

る。フシけに古への。木の丸殿を準へて。土階三尺茅茨剪らすと聞えしを。宮遷し給

ふこと民を憐み玉鉾の。道の道たる御恵。世界國土を守らせたまふ本社は八十末社な

り。ッキさてまた外宮の御社は。太夫此の

神の第一皇子。ッキあひに。三人相殿大神宮。末社は四十末社なり。太夫雨の宮。ッキ風の宮。三人風雨隨時のみそらの雲井。月讀日

讀。國は豊に民榮えさせ。給ひけるは誠に目度候ひき。フシ天の岩戸の暗き世も。

太夫爰は蛭子の御社。ッキ御誕生の折柄に。太夫難陀が口より。ッキあつ湯を出し。太夫跋陀が口より。ッキ温湯を出し。三人生湯をひ

かせ。奉り。ッキ綾が千反。太夫錦が千反。ッキ金襴。三人縵子の産着を召させ。給ひしかども。フシ三歳足立ち給はねば。天の岩樟。蘆

わけの。手繰りぐりぐり舟に。フシ乗せ奉り。青海原へ流し給ひて海を譲りに請取り給ひ西の宮の。惠美須御前。命長棹いと

もかしこき釣針おろし。あら目出鯛を釣り。釣つた姿のやれ扱。フシしをらしや。

此方は素盞鳴及びなき。八雲立つとの御歌は。大きにやはらく日の本の和歌のはじめの御神にて是ぞ祇園午頭天王。埤又此方は

藤原や天兒屋根の春日の宮。左手は八幡石

清水。かほど清しき御社を、フシ誰か熱田と名付けけん。爰は住吉生玉や、稻荷は五穀の上賀茂や、フシ又下賀茂に。貴船松の尾平野の神。北野に續く梅の宮。木夫昔に變らぬ今宮も。三人太神宮と伏拜む。五靈八社山王は。廿一社吹下しに。白髭の神波はさら〜。さら〜ゑいさらゑい。さら〜さつと。迷や迷や遊賀から。さきの御神は。是も八岐の大蛇ぞと伊吹風に多賀の神。鹿島香取諏訪三島。戸隠神田の大明神。總じて日本國中に。一萬七千餘社の神。木夫又吉備の大臣は。ワキ上には。木夫一萬ワキ下には。木夫粟。三人三石の數々の祖神は。これ此の御社わう。〜〜〜〜〜往古より。明〜歴〜さつ〜と。五十鈴川に立つ浪の音もしづかに君が代を。千代萬歳と守らせ給へと八拜九拜を。三三〇〇なし給ふ。然る所へ盛長は。關東勢を引具して御迎がてら參宮の望にて。夜を日に續いで参りしとさゝめいて夾りける。牛若御

喜悅まし〜て兩宮の御師を召し。太々神樂を。三三〇〇捧けらる。フシ神も納受。地ましましけん。社壇の屋根に三光現れ。音楽噴悲の濁りを清め。辰巳の方の神杉より源氏の白旗雲となり。光を添へてたな引きける人々あつと禮拜あれば。旗雲の中よりも。伊勢石清水住吉の。三社の御神あり〜と現じ給ひ。神は神なり神人を離れず誠を以てやどりとす。神は人の敬ひに依つて威をまし。人は神の恵によつて運の添ふ。源氏の末は萬々歳五穀豐饒民安全。國土豊に守るべしと彌陀釋迦觀音三體の。御本地を現し給へば牛若歡喜の思ひをなし。百拜千拜幣削をひるがへす小忌衣。東の勢をもよほして怨敵を追伐し。源氏繁昌國繁昌治まる。御代こそ久しけれ。